

大学生の心理的自立とキャリア探索および職業観の関連

Relationship between Psychological Independence,
Career Exploration and Work Values among
University Students

渡辺 伸子

東北公益文科大学総合研究論集第41号 抜刷

2021年7月30日発行

研究論文

大学生の心理的自立とキャリア探索および職業観の関連

Relationship between Psychological Independence, Career Exploration and Work Values among University Students

渡辺 伸子

Summary

This study was designed to clarify the relationship between the psychological and economic independence of adolescence. A survey examined relationships between psychological independence, career exploration, and work values of university students. University students ($N=367$) completed a questionnaire. Results of analyzing their responses indicated (1) a positive relationship between psychological independence and career exploration; (2) a positive relationship between psychological independence and work values; (3) a difference in psychological independence and work values based on whether students had part-time jobs as students. These results suggested that students' psychological independence and part-time work experiences promoted career exploration and formed career perspectives. Especially "building self" among psychological independence variables had multiple relationships with career exploration and work values. It is suggested that psychological independence through which people can maintain and assert different opinions is the foundation of future economic independence. Finally, we have discussed the application of this study to career education.

key words: university students, psychological independence, career exploration, work values, part-time job

問題と目的

心理学の領域においては、特に青年期の心理的自立についての研究が重ねられてきた。心理的自立の概念化を行った高坂・戸田（2003）は、心理的自立を行動・価値・情緒・認知の4つの側面に整理している。山田（2011）は、心理的自立を、「自分の感情や考え、行動に対して自ら主体的に管理・決定すること、かつ、それらに関して責任をもつこと」と定義している。

山田（2011）は、心理的自立を測定する項目を作成し、自分の意見を持ち、人と違っていても主張できるという内容の「自我の確立」、否定的な感情をコントロールする能力である「情緒的なコントロール」、問題を自分で解決しようとする態度である「自己決定と責任」、生きることを自覚した態度である「人生への積極的態度」、一人していると不安になるという内容の「個別性の未確立」の5因子を抽出した。適応の指標である抑うつとの関連を検討したところ、「個別性の未確立」が男女ともに抑うつと正の関連を示し、個別性が確立されておらず、一人にいる際に不安を感じる大学生ほど、抑うつであることが示された。

このように、適応にも一定の役割を果たす心理的自立は、子の青年期に、親がこれまで行ってきた積極的な関わりを慎み、子を大人として扱い始めることにより形成される（田中、2012）。山田（2011）は、心理的自立の一部の因子と基本的信頼感が正の関連を示すことを示しているが、田中（2012）の結果を総合して考えると、発達の早い時期に基本的信頼感が獲得された状態で青年期を迎え、親から大人扱いされることで、心理的自立が促されることが伺われる。

ところで、心理的自立は、自立の下位概念である。心理的自立の他にも様々な自立の種類が区別されている。たとえば、広く自立の概念化を試みた渡邊（1991）は、自立を情緒的・行動的・価値的・経済的・身体的・認知的側面の6側面に分類している。他にも、大石・松永（2008）は、自立という概念には、心理的自立の他に、経済的自立、社会的自立等が含まれるとしている。本研究では、心理的自立と経済的自立の関連を検討することで、心理的自立が経済的自立に対して果たす役割を明らかにする。

高坂（2018）は、大学生の心理的自立と経済的自立の関連を検討している。

経済的自立の項目を作成し、「無計画な消費行動」、「経済的リスクマネジメント」、「十分な収入」の3因子を抽出している。このうち、「十分な収入」は、生活費程度の収入があることを示す因子であり、学生の身分において、アルバイトではあるもののある程度の経済的自立状態にあることを示す内容にとらえることが可能である。しかしながら、「十分な収入」因子は男女それぞれの分析において、いずれも心理的自立とは有意な関連を示さなかった。

大石・松永（2008）の作成した自立尺度においても、経済的自立に相当する「経済的自活」下位尺度が見出されている。「経済的自活」は「家にお金を入れている」、「大学の学費を自分で払っている」、「自分で生活できるだけの収入を得ている」の3項目で構成されており、主に収入に関する項目がまとまったものと考えられる。「経済的自活」は自尊感情との相関係数が有意ではあるものの、その値は低い（全体： $r=.102$ ；男性： $r=.114$ ；女性： $r=.124$ ）。自尊感情は心理的に自立した状態において高くなることが想定可能であるが、経済的自立との関連は薄いというこの結果は、高坂（2018）と類似している。

このように、心理的自立と経済的自立の関連を検討した研究では、関連がみられないか、ごくわずかな関連が示されるのみにとどまっている。心理的に自立していても十分な収入を得ていなかったり、心理的に自立していても十分な収入を得ている場合があるということを示すこの結果は、十分な収入を得るための活動をするかどうか、あるいはそのような活動をどの程度するかは、心理的な要因ではなく、社会環境的な要因で決まると解釈することが可能だろう。つまり、仕送りが十分なためにアルバイトをする必要がない、あるいは学費のためにアルバイトはしたいがアルバイト先の都合で十分な収入には至らないといったことは、社会環境的な要因による部分が多いということだろう。しかしながら、卒業後の進路を展望し職業を探索する種々の活動は、在学中のアルバイトとは異なり、社会環境的な要因ではなく、心理的な要因に規定されやすいと想定される。そこで、本研究では、将来の経済的自立の準備段階として、キャリア探索と職業観に着目する。大学時代に適切なキャリア探索が行われ、職業観を形成することができた場合、卒業後の経済的自立が達成される可能性が高いと考えられるためである。

キャリア探索とは、職業情報を入手する目的を持った行動的あるいは認知的

な活動と定義されている (Stumpf, Colarelli, & Hartman, 1983; 安達, 2008)。キャリア探索は、「環境探索」と「自己探索」の2側面からとらえられている。安達 (2008) では、キャリア選択に対する自己効力感が高い者は、自己効力感の低い者よりも、いずれのキャリア探索も頻繁に行うことが報告されている。このことから、キャリア探索は、将来、経済的に自立するために重要な行動だと考えられる。

大学生のキャリア探索と動機づけおよび自己効力感の関連を検討した吉崎・平岡 (2015) では、キャリア探索が種々の心理的特性と関連を示すことが示されている。具体的には、環境探索と自己探索のいずれもが自己効力感、結果期待、統合的同一化的調整と正の関連を示していた。加えて、環境探索は自己決定感とも正の関連を示していた。自己決定は山田 (2011) の心理的自立の定義にも含まれていることから、心理的に自立していることがキャリア探索を活発化させると考えられる。

キャリア探索は、自己や環境について情報を探索する活動であるため、探索の結果として、職業観が形成されていくと想定することが可能である。深瀬・荒井 (2012) は、大学生のアイデンティティ・ステータスとフリーター肯定態度の関連を検討し、一部で関連が認められたことを報告している。フリーター肯定態度は、フリーターに対するイメージや価値観を測定する内容であることから、アイデンティティの形成状況と特定の働き方や職業観に関連があることを示唆する結果であるといえる。そこで、本研究では、心理的自立と職業観の関連についても検討する。職業観の測定には、職業価値観尺度 (菰田, 2006) を用いる。

ところで、青年期にキャリアを探索し、職業について考える機会は、キャリア教育の範囲でのみ行われるわけではない。アルバイトのような課外活動の経験も、青年のキャリア発達に影響を与えるものと考えられる。そこで、本研究では、アルバイトの経験についても尋ね、分析に利用する。

しかし、アルバイトの経験が青年に与えるキャリア発達上の影響については、これまでの研究で安定した結果が得られておらず、アルバイトの経験が青年に良い効果をもたらすとする研究と、そうではないとする研究がある。キャリア発達上良い効果をもたらすとする研究としては、大学生のアルバイト経験と

キャリア選択自己効力感の関連を検討した三保（2018）が挙げられる。アルバイトの経験がある者とない者では、キャリア選択自己効力感の5下位尺度のうち4下位尺度、すなわち「自己評価」、「情報収集」、「計画立案」、「意思決定の主体性度」で差がみられた。4下位尺度全てで、アルバイト経験のある者のほうが、経験がない者よりも得点が高かった。この結果からは、アルバイトの経験には、キャリア形成を促進する効果があると考えられる。

一方で、アルバイトの経験が青年にキャリア発達上良い変化をもたらすものではないと報告する研究もある。杉山（2009）は、アルバイト経験の違いによって就業動機の高さが異なるか検討している。その結果、アルバイトの経験状態によって就業動機の「対人志向」で差がみられたものの、その他の下位尺度およびキャリア意識を測定した項目では差がみられなかった。この結果から杉山（2009）は、アルバイトの経験そのものがキャリア形成に影響を与えるのではなく、どのような心構えでアルバイトを経験するかによるのではないかと述べている。以上のように、アルバイトの経験が青年にキャリア発達上良い変化をもたらすものかどうかについては、現在のところ一致した見解がない。そのため、本研究では、アルバイトの経験が青年に与える影響については探索的に検討する。

本研究では、青年の心理的自立と経済的自立の関係を明らかにするため、心理的自立とキャリア探索および職業価値観の関連について検討する。加えて、課外の活動であるアルバイトの経験状態によって、心理的自立、キャリア探索、職業価値観に差がみられるか探索的に検討する。

仮説は次の2点である。第一に、心理的に自立した状態にある者ほど、キャリア探索の程度が高いと予測する。前述の通り、吉崎・平岡（2015）において、自己決定感とキャリア探索の間に正の関連が示されており、自己決定を要素として含む心理的自立についても同様の結果が得られると予測されるためである。第二に、心理的に自立した状態にある者ほど、職業観において、自分の長所を活かせる仕事を志向する傾向にあると予測する。山田（2011）による心理的自立の定義には、自らの行動を主体的に管理・決定することが含まれている。職業価値観のうち、「自己価値」下位尺度は、自分の長所を生かし、責任を持って仕事をやりたいという内容であることから、心理的自立と職業価値観の「自

己価値」下位尺度には正の関連がみられるだろう。

ところで、本研究で用いる職業価値観尺度は、5下位尺度から構成されている。そのため、「自己価値」以外の4下位尺度についても、心理的自立との関連を探索的に検討することとする。

なお、山田（2011）や高坂（2018）等、これまで行われてきた研究において、心理的自立には性差が認められてきた。そのため、本研究でも必要に応じて男女別に分析を行う。

方法

調査内容 (1) 心理的自立：心理的自立を測定する質問項目（山田，2011）を使用した。「自我の確立」9項目、「情緒的なコントロール」8項目、「自己決定と責任」9項目、「人生への積極的態度」5項目、「個別性の未確立」7項目で構成されている。「とても当てはまる」から「全く当てはまらない」の5件法で回答を求めた。(2) キャリア探索：キャリア探索尺度（安達，2008）を使用した。「環境探索」7項目、「自己探索」6項目で構成されている。「まったく行っていない」から「非常によく行っている」の5件法で回答を求めた。なお、尺度を作成した安達（2008）の後、安達（2010）において再分析が行われ、新たに3因子解が採用されている。しかし、第3因子の信頼性が他の2因子と比較してやや低い。そのため、本研究では尺度の信頼性を重視し、安達（2008）の2因子を採用した。(3) 職業観：職業価値観尺度（菰田，2006）を使用した。自分自身の個性を活かせることなどを重視する内容である「自己価値」12項目、仕事が社会的に評価されていることを重視する内容である「社会的評価」9項目、残業がほとんどないなどの労働条件の良さを重視する内容である「労働条件」10項目、職場の人間関係の良さを重視する内容である「人間関係」7項目、将来的に会社から独立することなどを重視する内容である「組織からの独立」4項目で構成されている。「とてもこだわる」から「まったくこだわらない」の4件法で回答を求めた。(4) 現在のアルバイトの状況：①アルバイトをしているかどうかと②アルバイトをしている理由について尋ねた。アルバイトをしている理由として、「生活費や学費など、必要なお金を稼ぐため」、「趣味や遊びなどに使うお金を稼ぐため」、「社会経験になると考えたため」、「就職活動で

役に立つと考えたため」, 「知り合いや友人を増やしたいと思ったため」, 「特に理由はない」, 「その他」の7つの選択肢から1つ選択させた。(5) 高校時代のアルバイトの状況: アルバイトをしていたかどうかについて尋ねた。(6) デモグラフィックな変数: 性別, 年齢, 学年について尋ねた。

調査協力者 九州地方の国立大学1校, 中国地方の私立大学1校, 関東地方の私立大学2校, 東北地方の私立大学2校の合計6校の大学生を対象に調査を実施した。年齢が24歳以上の者と尺度項目のデータに欠損のある者を分析に含めないこととし, 80人分のデータを除外した。その結果, 367人分のデータが分析対象となった。性別は男性が141人, 女性が226人であった。学年の内訳は, 1年生が251人, 2年生が64人, 3年生が48人, 4年生が4人であった。年齢の平均は18.93 ($SD=1.08$) 歳であった。

調査時期 2017年7月に実施した。

調査方法 質問紙は, 講義時間内に質問紙を配布し, その場で回答・回収した。一部の大学では, 講義時間内で配布し, 翌週の講義時間に回収した。

倫理的配慮 調査は, 著者の所属機関において倫理審査を受けた後, 実施された。

結果

基本統計量および相関分析

心理的自立を測定する項目(以下, 心理的自立項目と呼ぶ), キャリア探索尺度, 職業価値観尺度の各下位尺度について, 各項目の得点を合計して項目数で除した得点を下位尺度の得点として用いた。それぞれ, 得点が高いほど, 下位尺度の表す内容がより強く反映された状態になるように得点化した。各尺度の基本統計量を Table 1 に示した。いずれの下位尺度においても .74 以上の α 係数が得られ, 信頼性は十分であった。

次に, 各尺度間の相関係数を算出し, Table 2 に示した。ほとんどの下位尺度間で有意な正の相関がみられる傾向にあったが, 心理的自立項目の「個性性の未確立」がキャリア探索尺度の2つの下位尺度と有意な相関を示さなかった。また, 職業価値観尺度の「労働条件」が心理的自立の5つの下位尺度のうち4つと有意な相関を示さなかった。「労働条件」はキャリア探索尺度の2つの下

位尺度とも有意な相関を示さず、相関分析では他の尺度と関連を示さない傾向がみられた。

Table 1 各尺度の基本統計量と α 係数

	N	平均値	標準偏差	α 係数
心理的自立項目				
自我の確立	367	3.54	0.72	.88
情緒的なコントロール	367	3.60	0.72	.87
自己決定と責任	367	3.77	0.65	.87
人生への積極的態度	366	3.46	0.84	.86
個別性の未確立	367	2.53	0.82	.85
キャリア探索尺度				
環境探索	367	3.42	0.92	.86
自己探索	367	3.74	0.86	.83
職業価値観尺度				
自己価値	367	3.20	0.52	.90
社会的評価	367	2.86	0.56	.83
労働条件	367	3.01	0.54	.84
人間関係	367	3.34	0.56	.87
組織からの独立	367	2.49	0.70	.74

Table 2 各尺度間の相関係数 (N = 367)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
心理的自立項目											
1 自我の確立											
2 情緒的なコントロール	.610**										
3 自己決定と責任	.617**	.630**									
4 人生への積極的態度	.695**	.569**	.641**								
5 個別性の未確立	-.156**	-.145**	-.262**	-.101+							
キャリア探索尺度											
6 環境探索	.305**	.233**	.270**	.337**	.071						
7 自己探索	.461**	.272**	.358**	.371**	.003	.644**					
職業価値観尺度											
8 自己価値	.362**	.255**	.353**	.393**	.114*	.416**	.351**				
9 社会的評価	.245**	.236**	.268**	.295**	.250**	.347**	.266**	.750**			
10 労働条件	.037	.005	.007	-.047	.274**	.024	.069	.296**	.375**		
11 人間関係	.186**	.171**	.154**	.261**	.258**	.284**	.211**	.722**	.740**	.387**	
12 組織からの独立	.300**	.223**	.236**	.275**	.211**	.295**	.220**	.592**	.619**	.262**	.469**

注) ** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$ 。

心理的自立項目を説明変数にした重回帰分析

心理的自立項目と他の変数の関連を検討した。山田（2011）や高坂（2018）等、心理的自立については性差が認められていることから、男女別に分析を行った。

キャリア探索尺度を目的変数にした重回帰分析の結果 心理的に自立した状態にある者ほど、キャリア探索の程度が高いという第一の仮説について検討するために、心理的自立項目を説明変数に、キャリア探索尺度を目的変数にして、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。男性の結果をTable 3に、女性の結果をTable 4に示した。

男性では、キャリア探索尺度の「環境探索」を目的変数にした場合に、心理的自立項目の「人生への積極的態度」との間に有意な正の関連がみられた（ $\beta = .293, p < .01, R^2 = .086, p < .01$ ）。「自己探索」を目的変数にした場合に、「自我の確立」との間に有意な正の関連がみられた（ $\beta = .512, p < .01, R^2 = .262, p < .01$ ）。

Table 3 心理的自立項目を説明変数とした重回帰分析の結果（男性：N = 141）

心理的自立項目	キャリア探索尺度		職業価値観尺度				
	環境探索	自己探索	自己価値	社会的評価	労働条件	人間関係	組織からの独立
自我の確立		.512**	.340**				
情緒的なコントロール				.334**			
自己決定と責任						.256**	.330**
人生への積極的態度	.293**						
個性性の未確立			.204*	.354**	.308**	.357**	.318**
R^2	.086**	.262**	.157**	.176**	.095**	.193**	.210**

注) 表中の数字は標準化偏回帰係数。** $p < .01$, * $p < .05$ 。

Table 4 心理的自立項目を説明変数とした重回帰分析の結果（女性：N = 226）

心理的自立項目	キャリア探索尺度		職業価値観尺度				
	環境探索	自己探索	自己価値	社会的評価	労働条件	人間関係	組織からの独立
自我の確立	.265**	.336**	.312**	.211**	.300**		.234**
情緒的なコントロール							
自己決定と責任	.252**	.223**	.300**	.255**			.177*
人生への積極的態度					-.224*	.324**	
個性性の未確立	.136*	.127*	.169**	.327**	.250**	.238**	.211**
R^2	.201**	.238**	.282**	.213**	.103**	.133**	.144**

注) 表中の数字は標準化偏回帰係数。** $p < .01$, * $p < .05$ 。

心理的自立項目の「自我の確立」および「人生への積極的態度」とキャリア探索尺度の間に部分的に正の関連がみられ、第一の仮説を支持する結果が得られた。

女性では、「環境探索」を目的変数にした場合に、「自我の確立」、「自己決定と責任」、「個別性の未確立」との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .136 \sim .265$, $p < .01 \sim .05$, $R^2 = .201$, $p < .01$)。「自己探索」を目的変数にした場合にも、同じ3下位尺度との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .127 \sim .336$, $p < .01 \sim .05$, $R^2 = .238$, $p < .01$)。心理的自立項目の「自我の確立」、「自己決定と責任」が2種類のキャリア探索と正の関連を示したことから、第一の仮説が支持された。一方で、心理的自立が未熟であることを表す「個別性の未確立」とも正の関連が得られたことは仮説に反する結果であった。なお、性差について着目すると、全体として、男性と比較して女性で有意な関連が多くみられた。

職業価値観を目的変数にした重回帰分析の結果 心理的に自立した状態にある者ほど、職業観において、自分の長所を活かせる仕事を志向する傾向にあるという第二の仮説について検討するために、心理的自立項目を説明変数に、職業価値観尺度を目的変数にして、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。男性の結果をTable 3に、女性の結果をTable 4に示した。

まず、男性について分析を行った。男性では、職業価値観尺度の「自己価値」を目的変数とした場合に、心理的自立項目の「自我の確立」および「個別性の未確立」との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .204 \sim .340$, $p < .01$, $R^2 = .157$, $p < .01$)。

探索的に関連を検討することとした4下位尺度についても、同様に分析を行った。「社会的評価」を目的変数とした場合に、「自己決定と責任」および「個別性の未確立」との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .334 \sim .354$, $p < .01$, $R^2 = .176$, $p < .01$)。「労働条件」を目的変数とした場合に、「個別性の未確立」との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .308$, $p < .01$, $R^2 = .095$, $p < .01$)。「人間関係」を目的変数とした場合に、「人生への積極的態度」および「個別性の未確立」との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .256 \sim .357$, $p < .01$, $R^2 = .193$, $p < .01$)。「組織からの独立」を目的変数とした場合に、「人間関係」と同様に、「人生への積極的態度」および「個別性の未確立」との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .318 \sim .330$,

$p < .01$, $R^2 = .210$, $p < .01$ 。

男性では、自分の長所を活かせる仕事を志向する傾向である「自己価値」が心理的自立項目の「自我の確立」と正の関連を示したことから、第二の仮説が支持された。しかし、心理的自立が未熟であることを表す「個別性の未確立」とも正の関連が得られたことは仮説に反する結果であった。また、探索的に関連を検討した4下位尺度全てで、心理的自立と有意な相関が得られた。

次に、女性について分析を行った。第二の仮説を検討するため、「自己価値」を目的変数として重回帰分析を行ったところ、「自我の確立」、「自己決定と責任」、「個別性の未確立」との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .169 \sim .312$, $p < .01$, $R^2 = .282$, $p < .01$)。

探索的に関連を検討することとした4下位尺度についても、同様に分析を行った。「社会的評価」を目的変数とした場合に、「自己価値」と同様に、「自我の確立」、「自己決定と責任」、「個別性の未確立」との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .211 \sim .327$, $p < .01$, $R^2 = .213$, $p < .01$)。「労働条件」を目的変数とした場合に、「自我の確立」および「個別性の未確立」との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .250 \sim .300$, $p < .01$, $R^2 = .103$, $p < .01$)。「人生への積極的態度」は有意な負の関連を示した ($\beta = -.224$, $p < .05$)。「人間関係」を目的変数とした場合に、「人生への積極的態度」と「個別性の未確立」が有意な正の関連を示した ($\beta = .238 \sim .324$, $p < .01$, $R^2 = .133$, $p < .01$)。「組織からの独立」を目的変数とした場合に、「自己価値」および「社会的評価」と同様に、「自我の確立」、「自己決定と責任」、「個別性の未確立」との間に有意な正の関連がみられた ($\beta = .177 \sim .234$, $p < .01 \sim .05$, $R^2 = .144$, $p < .01$)。

女性では、職業価値観尺度の「自己価値」と心理的自立項目の「自我の確立」および「自己決定と責任」が正の関連を示した点は第二の仮説を支持する結果である。一方で、男性の結果と同様に、「個別性の未確立」が正の関連を示した点は、仮説に反する結果であった。また、探索的に関連を検討した4下位尺度全てで、男性の結果と同様に、心理的自立と有意な相関が得られた。なお、性差について着目すると、全体として、男性と比較して女性で有意な関連が多くみられた。

アルバイトの経験による各尺度の得点の比較

大学および高校時代のアルバイト経験を尋ねた。結果を Table 5 に示した。大学・高校時代ともにアルバイトの経験がない者が 111 人、高校時代のみアルバイトの経験がある者が 20 人、大学時代のみアルバイトの経験がある者が 149 人、大学・高校時代ともにアルバイトの経験がある者が 87 人であった。

Table 5 高校時代と大学時代のアルバイトの経験状況のクロス集計表

	高校時代のアルバイト経験		合計
	なし	あり	
大学時代のアルバイト経験			
なし	111	20	131
あり	149	87	236
合計	260	107	367

アルバイトの経験によって心理的自立項目、キャリア探索尺度、職業価値観尺度の得点に差がみられるかについて検討するため、高校時代のアルバイト経験の有無と大学時代のアルバイト経験の有無を独立変数とした 2×2 の分散分析を行った。その結果、心理的自立項目の「人生への積極的態度」で大学時代のアルバイト経験の主効果がみられた ($F(1, 362) = 6.434, p < .05$)。大学時代のアルバイトの経験がある学生の方が、経験がない学生よりも「人生への積極的態度」の得点が高かった (経験なし群の平均値 3.246, $SE = 0.101$; 経験あり群の平均値 3.540, $SE = 0.056$)。大学時代のアルバイトの経験がある学生の方が、経験がない学生と比較して、人生に対して積極的な態度を形成していることが示された。

加えて、職業価値観尺度の「労働条件」で大学時代のアルバイト経験の主効果がみられた ($F(1, 363) = 4.436, p < .05$)。大学時代のアルバイトの経験がない学生の方が、経験がある学生よりも「労働条件」の得点が高かった (経験なし群の平均値 3.121, $SE = 0.065$; 経験あり群の平均値 2.964, $SE = 0.036$)。大学時代のアルバイトの経験がない学生の方が、経験がある学生と比較して職業の労働条件を気にかける傾向が示された。

アルバイトの理由による各尺度の得点の比較

大学時代にアルバイトの経験がある者は236人であった（Table 5）。そのうち、アルバイトをする理由を回答した233人の内訳をTable 6に示した。「生活費や学費など、必要なお金を稼ぐため」が80人、「趣味や遊びなどに使うお金を稼ぐため」が116人、「社会経験になると考えたため」が24人であり、以上の3つの理由が主要な理由であると考えられた。

アルバイトの目的によって心理的自立項目、キャリア探索尺度、職業価値観尺度の得点に差がみられるかについて検討するため、1要因3水準の分散分析を行った。アルバイトをする理由の中でも選択者が多かった3つの理由を群として用いた。その結果、いずれの尺度においても有意な差はみられなかった。

Table 6 大学時代にアルバイトをした理由の集計

番号	理由	人数
1	生活費や学費など、必要なお金を稼ぐため	80
2	趣味や遊びなどに使うお金を稼ぐため	116
3	社会経験になると考えたため	24
4	就職活動で役に立つと考えたため	4
5	知り合いや友人を増やしたいと思ったため	0
6	特に理由はない	4
7	その他	5
合計		233

考察

本研究では、青年の心理的自立と経済的自立の関係を明らかにすることを目的に、大学生を対象として、心理的自立、キャリア探索、職業観の関連を検討した。心理的自立項目、キャリア探索尺度、職業価値観尺度を用いて、2点の仮説について検討した。以下、それぞれの仮説について述べた後、探索的に検討した職業価値観の4下位尺度との関連について述べる。また、探索的に検討したアルバイトの経験による差について述べる。

仮説は2点であった。第一に、心理的に自立した状態にある者ほど、キャリア探索の程度が高いと予測した。男性では、心理的自立の「人生への積極的態度」とキャリア探索の「環境探索」の間に正の関連がみられた。これは、生き

ることの意味を自覚した自立の状態にあるほど、環境について探索するという傾向を表している。また、心理的自立の「自我の確立」とキャリア探索の「自己探索」の間に正の関連がみられた。これは、人との違いを恐れないという自立の状態にあるほど、自己について探索するという傾向を表している。以上から、男性については、第一の仮説について、一部で支持されたといえる。

女性では、心理的自立の「自我の確立」および「自己決定と責任」がキャリア探索の「環境探索」および「自己探索」と正の関連を示していた。「自我の確立」は人との違いを恐れない状態を示し、「自己決定と責任」は自分の力で問題解決を図る態度を示している。これらの状態を高く示すほど、環境と自己のいずれについても探索していく傾向にあった。そのため、女性についても、第一の仮説は支持されたといえる。

しかしながら、女性では、第一の仮説では想定していなかった関連が確認された部分があった。心理的自立の中でも、一人でいることに不安を感じるという内容の「個別性の未確立」が、キャリア探索と正の関連を示していた。これは、自立が未熟である状態であるほど、環境と自己の両面でキャリア探索が活発であることを示しており、第一の仮説に反する結果である。なぜ、心理的自立が未熟であるのに、キャリア探索が活発であるのだろうか。これについては、個別性が未確立で、他者と自己の違いなど、自分自身についての情報が不足しているために、環境や自己について探索せざるを得ないという状態も想定可能であるかもしれない。女性では、心理的に自立していない場合にもキャリア探索が進むことが起こりうるというこの結果は、支援の際に留意すべき結果であるといえるだろう。

第二に、心理的に自立した状態にある者ほど、職業観において、自分の長所を活かせる仕事を志向する傾向にあると予測した。男性では、心理的自立の「自我の確立」が職業価値観の「自己価値」と正の関連を示した。人との違いを恐れないという自立の状態にあるほど、職業では自分の長所を活かせることを重視するというこの関連は、第二の仮説に合致した結果である。そのため、男性において、第二の仮説は支持されたといえる。

女性では、心理的自立の「自我の確立」および「自己決定と責任」が職業価値観の「自己価値」と正の関連を示した。「自我の確立」については男性と同

様の結果であった。加えて、「自己決定と責任」と「自己価値」の関連は、自分の力で問題解決を図る態度を強く示すほど、職業では自分の長所を活かせることを重視するという関連であり、これについても、第二の仮説に整合的である。そのため、女性においても、第二の結果は支持されたといえる。

一方で、男女ともに、第二の仮説に反して、心理的自立の「個別性の未確立」と職業価値観の「自己価値」の間に正の関連がみられた。また、探索的に検討した部分においても、男女ともに、心理的自立の「個別性の未確立」と職業価値観の他の4つの下位尺度との間に正の関連が得られた。山田（2011）では、「個別性の未確立」が大学での意欲低下や進路への意欲低下を抑制することが示されている。つまり、個別性が確立されていないほど、これらの意欲が保持されていた。これは、個別性が未確立である方が、他者が望ましいとする価値観に沿った行動をとることができるためと考察されている。本研究で用いた職業価値観は全体として一般的に望ましいとされる内容であったために、山田（2011）で示された結果と類似した関連が得られたものと考えられる。

次に、探索的に検討した職業価値観の他の4つの下位尺度と心理的自立の関連について考察する。職業価値観の「社会的評価」、「人間関係」、「組織からの独立」は、心理的自立の下位尺度のうち、心理的に自立している内容のものと正の関連を示す傾向にあった。第二の予測には含めなかったが、関連を示した職業価値観の3つの下位尺度のうち「社会的評価」と「人間関係」は、他者との良好な関係を重視する職業観といえる。そのため、心理的に自立し、自分なりの意見を持ちつつも、異なる価値観の他者の意見を参考にできる心理的自立の状態であれば、これらの職業観を強く持つことは、第二の仮説とも一貫性のある結果である。

一方で、女性では職業価値観の「労働条件」が心理的自立の「自我の確立」と正の関連を、「人生への積極的態度」と負の関連を示した。前者の関連については、労働条件に重きを置く者ほど、自我が確立している状態にあるという関連である。労働条件の内容として、項目レベルでは、残業がほとんどないことや、土日に休めること、プライベートの予定を優先できることなどが示されている。そのため、自我が確立した状態にある者は、上司や同僚などの他者の干渉を受けず、就業規則の通りに仕事をし、自分の時間を確保したいという志

向が強いといえる。自分の意見を持ち、自立しているからこそ、他者の干渉を受けたくないと考えるのかもしれない。後者の関連については、「人生への積極的態度」で示されるような、自らの能力で人生を切り開いていくという自信を強く持っている場合には、労働条件が多少悪くても、入社後に対処することができるように生じるのかもしれない。労働条件は、大学生のキャリア選択に影響を及ぼし（廣森，2018），入職1年後の職場適応感と関連する要因である（風間・山下，2019）。女性にとって、労働条件を気にすることは、心理的に自立した結果であり、自らの将来の職業継続を志向することにつながるのだろう。

心理的自立と経済的自立の関係について考えた場合、大学生としての生活の中での経済的自立を指標とした高坂（2018）や大石・松永（2008）と比較すると、本研究ではより明確な関連が得られた。特に、心理的自立の中でも「自我の確立」が、キャリア探索及び職業観と多くの関連を示していた。人と違う意見を持ち、それを主張できる心理的自立の状態にあることが、将来的に経済的自立に至るための基盤と考えられる。

最後に、アルバイトの経験についての結果について述べる。アルバイトの経験が心理的自立、キャリア探索、職業観にどのような影響を与えるのか探索的に検討することも本研究の目的であった。大学および高校時代のアルバイト経験で回答者を4群に分け、各尺度の得点を比較したところ、心理的自立の「人生への積極的態度」と職業価値観の「労働条件」で、大学時代のアルバイト経験による効果がみられた。心理的自立の「人生への積極的態度」は、大学時代にアルバイトの経験がある学生の方が、経験がない学生よりも得点が高かった。積極的な態度があるために、大学時代にアルバイトに挑戦するようになるという説明と、アルバイトを経験したために、より積極的な態度が形成されるという説明が可能である。職業価値観の「労働条件」は、大学時代にアルバイトの経験がない学生の方が、経験がある学生よりも得点が高かった。これについても2種類の説明が可能である。つまり、労働条件を気にしすぎるあまり、大学時代にアルバイトに踏み切ることができないという説明と、アルバイトを経験していないために、労働条件を過度に気にするという説明である。いずれにせよ、アルバイト経験のある大学生の方が経験のない大学生と比較してキャリア

選択自己効力感が高い傾向にあることを報告した三保（2018）の結果と本研究で得られた結果には類似性がみられる。本研究の結果からは、アルバイトは課外の活動ではあるものの、キャリア発達に部分的に促進的な影響を与える活動と考えられる。本研究は一時点のデータであるため、これらの関連がアルバイトの経験によるものかどうか断定することはできない。そのため、今後は、アルバイトの経験の効果を明らかにするために、アルバイトを経験する前と後で調査をするなど、因果関係に言及可能な研究が望まれる。

また、大学時代のアルバイトの理由で回答者を3群に分け、各尺度の得点を比較したところ、差はみられず、アルバイトの経験によって心理的自立、キャリア探索、職業価値観で示されるような心理的・職業的自立には差が生じないことが示唆された。この結果と、アルバイトの経験の有無の結果を総合すると、アルバイトに臨む際の心構え等よりも、実際にアルバイトを経験して与えられた役割を果たす経験をすることの方が、心理的自立や職業観に差を生じさせるものと推察される。アルバイトやインターンシップなどの職業を体験する活動については、事前に目的を明確化できているかどうかにかかわらず、まずは実際に参加し、体験することがキャリア発達を促す上では重要であるといえるだろう。

本研究では、青年の心理的自立と経済的自立の関係を明らかにすることを目的に、心理的自立、キャリア探索、職業価値観の関連を検討した。そして、心理的に自立した状態にあるほど、キャリア探索を行う傾向にあるとともに、自分の長所を活かせる職業を志向する傾向にあることを明らかにした。本研究の結果は、心理的な自立を支援することでキャリア発達が促進されることを示唆するものであり、キャリア教育に一定の知見をもたらすものといえる。

しかしながら、本研究には限界もある。調査協力者は半分以上が1年生であり、7月という調査時期を考慮すると、自らのキャリアについて具体的な活動を行っている時期ではない。そのため、本研究の結果が、本格的な就職活動の始まる3年生後半以降の大学生にも適用可能かについては議論が必要である。

加えて、本研究では、仮説を設定して着目した点と異なる部分においても関連が見出された。特に、女性において、心理的な自立と労働条件の重視の関連には複雑な関係があることが示唆された。女性の就職活動を支援する際に、労

働条件の重視にどのように対応すべきか、心理的な自立との関連からさらなる知見が望まれる。

引用文献

- 安達智子 (2008). 女子学生のキャリア意識——就業動機, キャリア探索との関連—— 心理学研究, 79, 27-34.
- 安達智子 (2010). キャリア探索尺度の再検討 心理学研究, 81, 132-139.
- 深瀬裕子・荒井佐知子 (2012). 大学生の職業意識とアイデンティティ・ステイタス 広島大学心理学研究, 12, 85-91.
- 廣森直子 (2018). 地方の若者の地域移動・定着とキャリア選択に関する探索的研究——福祉系大学生へのインタビューからみる就業地の選択—— 青森県立保健大学雑誌, 18, 43-51.
- 風間文明・山下倫実 (2019). 新規学卒就職者の職場適応の規定因に関する縦断的研究 十文字学園女子大学紀要, 50, 3-17.
- 菰田孝行 (2006). 大学生における職業価値観と職業選択行動との関連 青年心理学研究, 18, 1-17.
- 高坂康雅 (2018). 大学生における心理的自立と経済的自立・社会科との関連 和光大学現代人間学部紀要, 11, 123-134.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2003). 青年期における心理的自立 (I) ——「心理的自立」概念の検討—— 北海道教育大学教育実践総合センター紀要, 4, 135-144.
- 三保紀裕 (2018). 大学生におけるアルバイト観とキャリア選択での自己効力感, キャリア意識の関連 応用心理学研究, 44, 51-63.
- 大石美佳・松永しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態——自立尺度の作成—— 日本家政学会誌, 59, 461-469.
- Stumpf, S. A., Colarelli, S. M., & Hartman, K. (1983). Development of the Career Exploration Survey (CES). Journal of Vocational Behavior, 22, 191-226.
- 杉山成 (2009). アルバイト経験はキャリア意識の形成にどのような影響を与えるのか (2) ——アルバイトの位置づけに関する研究—— 小樽商科大学人文研究, 117, 1-14.

- 田中輝美(2012). 大学生の認知する親の自立促進的態度と心理的自立の関連について カウンセリング研究, 45, 218-228.
- 渡邊恵子(1991). 自立の概念化の試み 日本女子大学紀要人間社会学部, 1, 189-206.
- 山田裕子(2011). 大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連 青年心理学研究, 23, 1-18.
- 吉崎聡子・平岡恭一(2015). 自己決定理論に基づく動機づけと自己決定感からみたキャリア探索 心理学研究, 86, 55-61.